

Book Review 36-7 漂流 #バタン島漂流記

『#バタン島漂流記』（西条奈加著）を読んでみた。著者は北海道生まれ。2005年に日本ファンタジーノベル大賞、2012年に中山義秀文学賞、2015年に吉川英治文学新人賞、2021年に直木三十五賞を受賞。

1668年、渥美半島沖で漂流した千石舟が難破してしまう。船乗りたちは大海原を漂流する。流れ着いたのがフィリピンのバタン島である。そこで異国の民に囲まれながら、舟を作り、それに乗って日本を目指す話である。これは史実を元に行っているらしい。

バタン島とはフィリピン北部にあるバタン諸島の主要3島の一つで2番目に大きい。20km程度の大きさの島。ダンベル型の火山島。歴史的にはこの後も江戸時代には3回日本舟が漂着している。時が流れて1941年12月8日、太平洋戦争開始時に日本軍はルソン島北岸から190km沖にあるバタン島へ上陸した。

勝倉壽一氏が日本人の書いた18の小説を『漂流民小説の研究』の中で紹介している。そのうちの『漂流』（吉村昭著）を取り上げよう。天明年間、時化に遭って黒潮に乗ってしまった男たちが、絶海の火山島に漂着する。水も湧かず、生活の手段とてない無人の島で、仲間の男たちは次々と倒れて行ったが、土佐の船乗りがただ一人生き残って、12年に及ぶ苦闘の末、ついに生還する。その壮絶な生きざまを描いた。我妻が圧倒的感動で声も出なかった長編ドキュメンタリー小説である。

「無人島を物語の舞台とした小説」というカテゴリーがあるようだ。

『十五少年漂流記』（ジュール・ベルヌ著）少年向けの冒険小説で、無人島に漂流した少年達が力を合わせて生活していく物語を描いている。

『蠅の王』（ウィリアム・ゴールディング著）

戦いを避けるために子供たちを疎開地へ運ぶ飛行機が海へ墜落し、少年だけが助かった。南太平洋の無人島で、規則を作り、烽火をあげ続けることで救援を待つ（豚を狩ることで上等なご馳走を得る）。最初こそ協力し合っていた少年たちであったが、そのうちに少年たちの間で対立が起こる。次第に少年たちの内面の獣性が目覚めていき、仲間の一人に手をかける。孤立してしまった少年が恐怖や悲しみに苦しみながらも、森に放火されて島中を逃げ回ることになる。その火を放ったことで、救助隊に見つかって少年たちは救助される。大人

たちには「懸命にルールを守り秩序正しく生きようとした」と、少年は涙を流し大人に平気で嘘を語るであった。「蠅の王」とは、聖書に登場する悪魔を指しており、作品中では蠅が群がる豚の生首を「蠅の王」と形容している。

『ロビンソン・クルーソー』（ダニエル・デフォー著）

ロビンソン・クルーソーは船乗りになり、無人島に漂着し、独力で生活を築いてゆく。この無人島には時々近隣の島の住民が上陸しており、捕虜の処刑及び食人が行なわれていた。ロビンソンはその捕虜の一人を助け出し、フライデーと名づけて従僕にする。28年間を過ごした後、帰国するまでが描かれている。

本書は淡々と読み進んで終わってしまった。読むなら『漂流』（吉村昭著）と『蠅の王』（ウィリアム・ゴールディング著）をお勧めする。